

## 第2節 他の内水面増殖

### 1. やまめ放流

ヤマメ *Oncorhynchus masou masou* は冷水性で溪流を好むサケ科の魚である。本県では、広瀬川上流の鍋野川と平川、川内川上流の羽月川・山野川・十曾川に在来のヤマメが生息していたといわれる<sup>1)</sup>。しかし、現在も見られるか明らかでない。

移殖放流については、県大口養魚場が1968, 1969(昭43, 44)年に東京都水試奥多摩分場から発眼卵を移入。ふ化仔魚から養成した親魚をもとに、1982(昭57)年まで毎年、種苗生産を行い<sup>2)</sup>、養殖用供給のほか、放流試験を実施している。放流された河川は次のとおりである(水試関係者からの聴取等)。

川内川水系；南川，泊野川，十曾川，市山川，青木川。広瀬川水系；樋之谷川。別府川水系；山田川。本城川。高隈渓谷。高山川。辺塚川。田代川。高松川。霧島川。安房川水系；荒川，小杉谷。宮之浦川。

上記のうち、安房川水系は、1970(昭45)年関西淡水魚保護協会の木村英造氏が鹿児島県自然愛護協会の赤星昌氏、鹿大水産学部の今井教授の理解、協力を得て、宮崎県五ヶ瀬の養魚場から稚魚400尾を試験放流、1971年に(財)淡水魚保護協会(理事長は前記木村氏)が県大口養魚場の稚魚10,000尾、成魚200尾を同養魚場、鹿大水産学部、上屋久町等の協力で放流したものである<sup>3)</sup>。同協会は、1987, 1990(昭62, 平2)年に宮之浦川支流白谷川と、1988, 1989, 1991年に屋久町鯛ノ川に、前記小杉谷で釣獲されたものを放流しており、その後の調査で、いずれも定着が確認されている<sup>3)</sup>。現在、屋久島のほとんどの河川にはヤマメが生息しているといわれているが、上記以外の経緯については、今回、調査できなかった。

大口養魚場の閉鎖に伴い、1983(昭58)年からは、鹿児島県養鱒漁協が種苗生産を行っており、最近では、1990~1994(昭2~6)年に霧島町が観光振興の一環として霧島川に毎年1万尾、高山町が愛護会事業で1993, 1995(平5, 7)年に高山川に各年稚魚約3,000尾を放流している。

本県では、一部の河川を除いて放流ヤマメの再生産は困難視されているので、内水面漁業の発展を図るには継続的な放流が必要である。

### 参考文献

- 1) 今井貞彦(1975): 屋久島の実験。「淡水魚」刊行号。
- 2) 鹿水試事報(1963, 1969, 1971~1982): 大口養魚場の部。
- 3) 紀村落釣(木村英造)(1996): 屋久島の渓谷へのヤマメの放流について「愛をもて渓魚を語れ」。平凡社。  
(小松 光男)

### 2. うぐい移殖放流

ウグイ *Leuciscus hakonensis* は、川内川水系に多く生息している。地方名はイダと呼ばれ、以前は動物性タンパク源として利用されていたが、最近では釣りの対象魚となっている。

1963(昭38)年3月に屋久島電工株式会社が、荒川ダム(安房川)に淡水魚を放流する計画を立て、鹿大水産学部の今井教授と大口養魚場が現地調査を行った。その結果、環境条件などから、適応性が強いとされるウグイを放流することになった。

大口養魚場は1962(昭37)年に、山野川で採捕したウグイ親魚から採卵、種苗を生産する技術を確立しており、1963年3月に、屋久島での放流用ウグイの生産を行った。

同年11月6日，人工生産のウグイ0年魚1,000尾，1年魚100尾を活魚車で鹿大水産学部に輸送。翌7日にビニール袋2個に酸素詰めして，鴨池空港から屋久島空港を經由して荒川ダム上流域に放流した。放流には鹿児島大学の今井教授と大口養魚場職員が同行した。鹿児島から現地までの輸送時間は4時間10分であった。なお，当時，荒川ダムにはコイが放流されている以外に他の魚類は生息していないといわれていた。その後，ヤマメ，ニジマスも放流されたが，特にウグイがよく繁殖している<sup>2)</sup>。

#### 参考文献

- 1) 鹿水試事報(1963):ウグイ活魚輸送について，鹿水試事報(昭38)，542
- 2) 今井貞彦(1975):屋久島の実験．淡水魚刊行号

(この項；小山 鉄雄)

### 3. ブラックバスの放流

オオクチバス *Micropterus salmoides* (俗称ブラックバス) は，本来，北米大陸の中部から東部の淡水域に棲息する魚で，極めて魚食性が強い。わが国へは1925(大14)年に芦ノ湖に移入されたのが最初といわれている。その後しばらくは他所への移殖は禁止されていたが，1975(昭50)年ごろから急激に分布域が広がり，全国河川湖沼養殖研究会の調査では，1988(昭63)年現在，北海道と岩手県を除く都府県に分布しているといわれる<sup>1)</sup>。

#### 1) 本県への導入の状況

1968(昭43)年，本県で初めて吹上町の中原池(通称さつま湖)にオオクチバス(全長15~20cm17尾，7cm1尾)とブルーギル(5~7cm129尾)が放流された。中原池には魚類が少なく，特に利用されるものがないこと，また閉鎖された内水面で他の水域に移動するおそれがないことから，レクリエーションの場の開発の一つとして，鹿児島大学水産学部の今井教授と吹上町が協議して行ったものである。ブルーギルとの組み合わせ放流は，アメリカでの例にならって相互の繁殖力を抑制するのが目的であった<sup>2,3)</sup>。

1976~1977(昭51~52)年，住吉池(蒲生町，始良町)に鹿児島市の釣り団体が，宮崎県の御池から運んだ5~25cm，56尾を放流した<sup>3)</sup>。

1984(昭59)年ごろ，蘭牟田池，大隅湖にも放流される。また，このころには吹上町の正円池にも生息が確認される(水産試験場指宿内水面分場)<sup>4)</sup>。

最近では，大抵の人工池や溜池に生息しているといわれる(釣り人からの聞き取り)。

#### 2) 移殖後の状況

前記のように，中原池の場合は，観光地としての利用開発の目的で公的に移殖されたが，他の池等には一部釣り人による無秩序な放流がされている。そして，いずれの水域でも定着し，既存の有用魚族に対する深刻な影響が生じている。なかでも住吉池や中原池ではワカサギが全くみられなくなり，大隅湖ではアユが激減し，蘭牟田池ではフナやコイの減少が著しい(町役場からの聞き取り)。池田湖には放流されたかどうか不明であるが，1984~1986(昭59~61)年の水試指宿内水面分場の調査<sup>5)</sup>では，生息は確認されていない。また，1992(平4)年4月，バス釣り人の数人が，「いることを信じて」ルアー釣りを試みたが，あたりは全くなかったことから，生息していないか，いても極めて少ないと考えられる(九州バス釣連盟情報)。

実態としてこれらの池等は遊漁の場となっており，ワカサギがいなくなった住吉池では，1985年から蒲生町と観光協会主催のバス釣り大会が開催されている。

### 3) 国・県の対応

全国内水面漁業協同組合連合会は水産庁の委託を受けて、1991～1993（平3～5）年に「外来魚対策検討委員会」を設置。外国産魚種（オオクチバス、ブルーギル）の生態、資源抑制対策、将来の移入魚への対応方針等を策定するための調査を行った。この時の報告書は各府県漁連にも配布され、外来魚問題に対する指針となっている。

報告書は、行政面の課題として「国内水域間の一元的な規制措置が必要」と指摘しており、水産庁はこれを受けて外来魚の移殖制限を行うため、1992年、4水振第1775号水産庁長官通達で「都道府県内水面漁業調整規則例の一部改正」について指導を行った。

本県では、1995（平7）年、規則第40号で「水産動物の移殖の制限」を追加規定（第36条）し、一部例外規定はあるものの、ブラックバス、ブルーギルの移殖を禁止した。

外来魚の移殖については、前記の調査が行われるまでに全国11の県で規制されていたが<sup>1)</sup>、現実にはこれらの県においても生息しており、釣り目的と思われる無秩序な放流が行われていたようである。今後、いまだ生息していない水域への放流が行われないよう、この規則を生かした徹底的な指導が必要である。

### 4) 参考文献

- 1) 全国内水面漁業協同組合連合会（1992）：ブラックバスとブルーギルのすべて、外来魚対策検討委託事業報告書。
- 2) 今井貞彦（1981）：ブラックバス かがしまの魚・春。南日本新聞（1981.3.19）。
- 3) 今井貞彦（1979）：ブラックバス放流が中原池と住吉池の魚類相に及ぼした影響。淡水魚第5号。
- 4) 水産試験場指宿内水面分場：ブラックバス関係資料綴
- 5) 水試指宿内水面分場（1984～1986）：池田湖資源培養実証試験Ⅰ。鹿水試事報 指宿内水面分場の部。  
(小松 光男)